

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 14 日現在

機関番号：25501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520024

研究課題名(和文) F・G・ユンガー技術哲学の現代的意義に関する学際的比較研究

研究課題名(英文) Interdisciplinary study on the actuality of F.G. Junger's philosophy of technology

研究代表者

桐原 隆弘(Kirihara, Takahiro)

下関市立大学・経済学部・教授

研究者番号：70573450

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はF・G・ユンガー『技術の完成』(1939年執筆、戦後に公刊)における技術論を哲学、ドイツ文学、エコロジー思想、科学技術史の各観点から総合的に検討することを目指した。同書の論点として、機械論的自然観と有機的生命観/人間観/社会観との絡み合い、技術による富/余暇の逆説的な減少過程、ならびに大衆のイデオロギーへの感染性および技術時代の戦争の全面戦争への展開、富(存在および所有)と時間(生産および余暇)の理論を軸とするエコロジー思想の萌芽を読み取った。ユンガー自身が有するこれら複数の論点を照らし合わせる作業から、科学技術の公共哲学的意義をめぐる議論に新たな一石を投じることができよう。

研究成果の概要(英文)：The present study aimed at the comprehensive examination of F. G. Junger's essay, "Die Perfektion der Technik" (written in 1939, published after the war, English; "The Failure of the Technology") from each point of view of philosophy, German literature, ecology and history of science and technology. The focused topics of the book were the following: 1) entanglement of mechanistic view of nature and organic view of life, human and society, 2) paradoxical process of decreasing of wealth and leisure by technology, as well as infectiousness of masses to ideology and inevitable deployment of wars in the technological era to all-out wars and 3) the sprouting of ecological idea on ground of the theory of wealth (of existence and of ownership) and of time (of production and of leisure). From synthetic examinations of these viewpoints as following task, it will be possible to stimulate discussion about the public-philosophical significance of science and technology.

研究分野：哲学

キーワード：技術哲学 ドイツ文学史 エコロジー思想 科学技術史

1. 研究開始当初の背景

(1) 全体構想

詩人、小説家、エッセイストとして活躍したフリードリヒ・ゲオルク・ユンガー(1898-1977)は、兄エルンストの陰に隠れ、今日では不当にも忘れられた作家と言えるかもしれない。兄同様、ドイツ青年運動に参加した彼は、18歳のとき志願兵として第一次大戦に出征、すぐ重傷を負って戦線を離脱した。この戦争体験と十一月革命への失望がユンガーをして「保守革命」の急進的論客とならしめた(『ナショナリズムの行進』1926など)。彼の思想はファシズム体験を経て、30年代末には徹底した文明批判、科学技術批判へと転回する。1939年に書き下ろし、10年後ようやく出版されたエッセイ『技術の完成』(Die Perfektion der Technik)によれば、ファシズムもまた世界大戦も、技術時代の必然的産物ということになる。ここにおいてユンガーは、狭い意味での政治的保守論者から、社会のあらゆる領域に浸透する技術機構の「進歩」、その支配の「完成」に警鐘を鳴らす、急進的保守思想家へと変貌したのである。

「装置と組織の機械化による自然の収奪」を目指す技術的合理性へのユンガーの徹底した批判は、アンドレアス・ガイアーも指摘するように、当時親交を結んでいたハイデガーの『技術への問い』(1962)に影響を与えた。またホルクハイマー/アドルノの『啓蒙の弁証法』(1944/47/69)における道具的理性批判にも同様の問題意識を見出すことができる。さらに、『技術の完成』は1970年代以降のエコロジー思想に対しても影響を及ぼしたと言われており、同書は特定のイデオロギーから自由な立場から技術文明の本質を問う本格的な哲学エッセイでありながら、今日まで十分に注目されてこなかった。今改めて同書を詳細に検討することによって、技術哲学の展開過程に新たな光を投げることができると思われる。

「F・G・ユンガー研究会」では、本研究開始まで小規模な勉強会の形で同書の翻訳と内容討論に取り組んできた。本研究ではこの成果を踏まえ、『技術の完成』の翻訳を完了させると同時に、その内容を哲学、ドイツ文学、科学史を専門とする研究者各々の観点から多角的に検討し、同書の現代的意義を解明することを目指した。

(2) 研究動向と本研究の位置づけ

米国においては『技術の完成』の英語版が出版され、ドイツ語圏での研究としては、アンドレアス・ガイアー『F・G・ユンガー 作品と生涯』(2007)、ウルリヒ・フレシュレ『F・G・ユンガーと ラジカルな精神』(2007)、

ダニエル・モラート『行為から放下へ M・ハイデガー、E・ユンガー、F・G・ユンガーにおける保守思想 1920 - 1960』(2007)など、保守主義と技術批判を核にユンガーの思想を論じた浩瀚な研究書が相次いでいる。

これに対し日本国内でのF・G・ユンガー技術論の研究は皆無であった。これは、例えばハイデガーに与えた兄エルンスト・ユンガーの影響に対して国内でも関心が寄せられていることを考えると不可思議な事態であったと言える。今井(分担者)は「新刊紹介 Fred Slanitz: Wirtschaft, Technik, Mythos. Friedrich Georg Jünger nachdenken」(日本独文学会編『ドイツ文学』第108号233頁、2002年)においてユンガー技術論の今日性を短く指摘はしたが、ハイデガーへの影響、E・ブロッホやホルクハイマー/アドルノとの比較、さらに20世紀ドイツ精神史における位置づけ、現代エコロジー思想との比較、科学技術思想史における意義といった観点からのF・G・ユンガー技術哲学の総合的な研究は未開拓領域であった。

(3) 本研究開始以前の研究成果との関連

桐原(代表者)は、カントを初めとする近代哲学を基盤として現代社会哲学研究を進め、特に2007年以降、技術哲学、エコロジー思想および経済倫理の研究を手掛けてきた。本研究開始以前にはハイデガー、E・ブロッホ、シュペーマンの技術哲学に関する論文を発表した(「ドイツにおける脱原発をめぐる討議 市民的公共性の観点と哲学的観点 (上)(下)」『下関市立大学論集』55巻2、3号掲載)。本論文末尾においては、巨大技術管理のための適切な社会制度は何かという問題を、効率、公正、安全をキーワードにして萌芽的にはあるが考察している。また3名の研究分担者(今井、中島、小長谷)はそれぞれ、現代ドイツ文学、エコロジー文学、科学史の分野において業績を積み上げてきた。一方「F・G・ユンガー研究会」では、『技術の完成』の版元(Vittorio Klostermann)の了承の上で諸言、第1章～第3章の翻訳を2008年に公表した。

2. 研究の目的

以上の経緯から本研究は以下のように研究目的を設定した。

- (1) 『技術の完成』の哲学的・科学技術的内容を明らかにしつつ、同書の翻訳作業を完成させる。
- (2) ユンガー技術論の哲学的意義を、特にハイデガーの「ゲシュテル」論、E・ブロッホの「技術ユートピア」論、批判的社会理論における「道具的理性批判」との

比較を通じて解明する。

- (3) ユンガー技術論の歴史的成立過程・影響作用を、20世紀ドイツ精神史の文脈から解明する。
- (4) ユンガー技術論のエコロジー思想・エコロジー運動との関連性を解明する。
- (5) ユンガー技術論の20世紀科学技術思想との関連性を解明する。
- (6) ユンガー技術哲学の観点から、科学技術の公共哲学的意義を解明する。

3. 研究の方法

(1) 概要

「学際的比較研究」による共同作業を基本的な方法とした。哲学的技術論、20世紀ドイツ精神史、エコロジー文学、科学史それぞれを専門とする研究者を中心に、「F・G・ユンガー研究会」を下関および京都で引き続き開催し、代表者、分担者、協力者の共同の討議を通じて技術哲学全般に関して知見を共有し、研究成果の公表を通じて問題提起を行ってきた。

(2) 研究体制

桐原（代表者）は、ドイツ技術哲学の比較研究の文脈からユンガー技術哲学の意義および影響作用を解明し、なおかつ全体の統括を行った。今井（分担者）は、他の文明論や技術論（シュペンゲラー、トーマス・マン、兄 E・ユンガーなど）と比較しながらユンガー技術論の今日性を探ると同時に、ナショナリズムから技術批判へと転回した思考の道筋を検証した。中島（分担者）は、左翼的エコロジスト、H・パーシェの作品との比較を通じて、保守や革新といった既成の定義づけにとらわれないF・G・ユンガーのエコロジー的核心を洗い出すとともに、H・D・ソローに始まるエコロジー文学の歴史の中に彼の技術論を位置づけることを試みた。小長谷（分担者）は、19世紀から20世紀初めにかけてヨーロッパを覆った科学主義的思想および哲学との関係や、P・フォアマンが「ワイマール文化、因果性、量子論 1918-1927」(1971)で描いたような、それまでの合理的な科学認識から距離をおく、ワイマール時代の非合理主義的思想の出現との関係を探りながら、20世紀前半の科学をめぐる思想的变化やその変遷におけるユンガーの技術哲学の位置づけを考察した。

なお「F・G・ユンガー研究会」の参加者である福山美和子氏が、翻訳に当たっての訳語のチェック・索引作成、ならびにドイツ語圏メディアにおける技術論の調査を中心に研究協力を行った。研究の進捗過程で、研究協力者として新たに熊谷エミ子氏（元龍谷大学

非常勤講師）、増田靖彦氏（龍谷大学准教授）、西尾宇広氏（龍谷大学非常勤講師）、稲葉瑛司氏（京都大学大学院生）が加わった。

4. 研究成果

上記の研究目的に照らし合わせながら、公刊された論文に絞って研究成果を報告する。

- (1) 『技術の完成』の哲学的・科学技術的内容を明らかにしつつ、同書の翻訳作業を完成させる。

月例研究会を下関市立大学、龍谷大学、水産大学校で開催し、本論部分の翻訳をほぼ完成した。（翻訳出版に向け、訳語チェック等の作業が残されている。）

- (2) ユンガー技術論の哲学的意義を、特にハイデガーの「ゲシュテル」論、E・ブロッホの「技術ユートピア」論、批判的社会理論における「道具的理性批判」との比較を通じて解明する。

この論点について体系的比較を行うには至らなかった。批判的社会理論、ハイデガーおよびブロッホの技術哲学については桐原（代表者）が本研究の開始以前の2011年度、以下の研究成果を発表している。

桐原隆弘、フランクフルトの規範秩序研究 批判的社会理論における技術論との関連から、『下関市立大学論集』第55巻第1号、2011、29-46

http://ypir.lib.yamaguchi-u.ac.jp/sc/me_tadata/1737

桐原隆弘、ドイツにおける脱原発をめぐる討議 市民的公共性の観点と哲学的観点（上）『下関市立大学論集』第55巻第2号、2011、47-59

http://ypir.lib.yamaguchi-u.ac.jp/sc/me_tadata/1752

桐原隆弘、ドイツにおける脱原発をめぐる討議 市民的公共性の観点と哲学的観点（下）『下関市立大学論集』第55巻第3号、2012、33-58

http://ypir.lib.yamaguchi-u.ac.jp/sc/me_tadata/1756

またユンガー技術論の哲学的意義に関しては以下の論文を公刊した。

桐原隆弘、目的論と技術的合理性 F・G・ユンガー『技術の完成』におけるカント解釈を手がかりとして、『下関市立大学論集』第57巻第3号、2014、69-92

<http://ypir.lib.yamaguchi-u.ac.jp/sc/me>

本論文はカントとユンガーの自然観（機械論および目的論）をめぐる見解の比較を主眼とする。『技術の完成』においてユンガーが折に触れて述べているように、彼の考察は疑似科学と言うべき観相学の方法であり、精密科学に依拠するカントの方法とは相いれないように見える。だが両者の思想にはいくつかの内容上の共通点がある。ユンガーはカントを機械論者として単純化するが、彼の目的論の扱いはユンガーが見るほど単純なものではなく、実際カントは『判断力批判』において有機体の自己組織能力・自己産出能力に言及している。一方、ユンガーは科学技術文明の批判という別の観点から、要素に還元しえない生命有機体の本質を論じている。ユンガーはさらに、人間自身に含まれる「原初的自然」(die elementare Natur)の技術的合理性への対抗性、「深い秩序」(die tiefere Ordnung)に根差し人間を自立させ、機械機構の組織(Organisation)に従属させるのではない制度(Institution)といった、生命観/人間観/社会観に関わる重要な論点を提起している。こうした論点は、カントの自然哲学および実践哲学とりわけ後者の「自律」「自己立法」を軸とする社会哲学構想を内容上補充しうるものである。

なお、本論文でも触れたが、ユンガーの因果性概念をめぐる歴史哲学的考察は思想史研究に対しユニークな観点を提供する。すなわち彼によれば、近代科学の勃興期から巨大技術の時代への移行に際して、因果性の概念は次のように推移する。「神の摂理」；これはリスボン大地震によって大きく動揺した。「自然必然性」；これにより自然は認識し支配・利用することの可能な客体となる。「運命論的因果性」；タイタニック号沈没事故に象徴されるように、巨大技術による自然への過大な負荷はその反作用としての大規模事故の危険を孕む。技術は大規模な形で「原初的自然」の諸力を取り込むことで、因果性概念においてふたたび洞察困難な古い運命論を呼び覚ます。こうした見方は宗教史と科学技術史双方の見地から、科学技術文明の本質を解明するための一助となるように思われる。

- (3) ユンガー技術論の歴史的成立過程・影響作用を、20世紀ドイツ精神史の文脈から解明する。
以下の論文を公刊した。

今井敦、革命的ナショナリズムから技術批判へ F・G・ユンガーの技術論(1)
『Germanistik Kyoto』第13号、2012、1-19
本論文は『技術の完成』上梓に至るまでの

ユンガーの人生および『ナショナリズムの進』における1920年代から30年代初めまでの彼の思想を検証したうえで、『技術の完成』の思想を通覧した。技術は利用可能な富を増やす反面、物的・人的資源を容赦なく掘り起こし、目的にかなった形に加工し、これを機械機構と組織の中に組み込むことで自然と人間を収奪する。また技術は人間を労働から解放し、余暇を増やすと考えられているが、実際には労働の形態を変えるだけで、機械の手足となる労働者を生みだし、細分化された労働を管理する「死んだ時間」(die tote Zeit)は「生きた時間」(die Lebenszeit)としての余暇をむしろ減らしていく。

ユンガーはまた、組織化され機械機構に仕える労働者が大都市において土地・財産(Eigentum)を、すなわち「独自のもの」(Eigentum)を奪われて標準化され、運搬可能・交換可能な要素として生きる様子を描写する。大衆がイデオロギーに感染しやすいこと、および技術時代の戦争が必然的に全面戦争へと向かうことをユンガーが指摘していることを受けて、本論文はユンガーが1920年代に信奉していたナショナリズムを放棄し、婉曲的に反ファシズムを表明するに至ったと結論づける。

なお本論文はF・G・ユンガー『技術の完成』を主題とする本邦初めての論考である。

今井敦、ユンガー兄弟の技術論 「総動員 / 総流動化 (die totale Mobilmachung)」概念を軸として 『ドイツ文学』(NEUE BEITRÄGE ZUR GERMANISTIK) 第148号、2014、56-70

本論文ではエルンスト・ユンガーおよびフリードリヒ・ゲオルク・ユンガー兄弟の技術論の比較を行った。両者は「総動員 / 総流動化」に技術の本質作用を認める点において共通しているが、技術を使用し対象を支配する「労働者の形態」に身を投じることによって人間の自由を見いだそうとしたエルンストとは対照的に、フリードリヒ・ゲオルクは自動機械と化した「権力への意志」が人間と自然を支配するという事態こそが技術の本質であるとする。F・G・ユンガーの技術論はグローバル化や流動化社会の地球規模の危機をいち早く指摘したと言える。

- (4) ユンガー技術論のエコロジー思想・エコロジー運動との関連性を解明する。
以下の論文を公刊した。

中島邦雄、F・G・ユンガーの『技術の完成』とエコロジー 「富」と「時間」の理論を中心に、『かいろす』第52号、2014、29-48

本論文はユンガーが機械と自然の組織化の表現手段として用いた「歯車」「パイプお

よびボイラー」といった形象に注目し、前者の表現する「死んだ時間」(die tote Zeit)と後者の表現する「機械自身も生命を持った生き物のように見えてしまう」様相とを対比する。さらにユンガーによる「所有としての富」(経済的財の生産・消費・蓄積)と「存在としての富」(「王侯的なあり方」・自由・余暇)との対比構造に着目し、測定可能かつ反復可能な「死んだ時間」を前者に、事物との相互影響関係において「無限に多くの」様相をもちうる「生きた時間」(die Lebenszeit)を後者に関連づける。ここから本論文は、「保護に委ねられているものたちの成長」を心がける人間による、「生きた時間」を共有する自然への共感に基づく自然の管理、すなわち、H・D・ソローに端を発するディーブ・エコロジーと区別される意味での「人間中心主義的」エコロジー思想がユンガーには見出されると結論づける。

(5) ユンガー技術論の 20 世紀科学技術思想との関連性を解明する。

前掲の桐原「目的論と技術的合理性」において部分的にこの問題に触れたが、ワイマル期の非合理主義的科学思想とユンガーとの関連性についての考察は継続課題である。定例研究会において小長谷(分担者)が科学史の観点からユンガーの科学技術観について多くの特徴的な点、問題となる点を指摘したため、これを受けて科学技術思想史の幅広い文脈でユンガーの思想を位置づけることを今後の研究課題としたい。

(6) ユンガー技術哲学の観点から、科学技術の公共哲学的意義を解明する。

前掲の桐原による本研究会開始以前の論文でこの論点を萌芽的に論じた。本研究の成果としては、前掲の桐原「目的論と技術的合理性」が機械論的自然観と有機的生命観/人間観/社会観との絡み合いを、今井「革命的ナショナリズムから技術批判へ」が技術による富/余暇の逆説的な減少過程、ならびに大衆のイデオロギーへの感染性および技術時代の戦争の全面戦争への展開を、今井「ユンガー兄弟の技術論」がグローバル化や流動化社会の地球規模の危機への警鐘を、中島「F・G・ユンガーの『技術の完成』とエコロジー」が富(存在および所有)と時間(生産および余暇)の理論を軸とするエコロジー思想の萌芽を、それぞれ『技術の完成』から読み取っている。ユンガー自身が有するこれら複数の観点を照らし合わせる作業を手始めとし、かつ科学技術思想史の幅広い文脈を考慮に入れながら、科学技術の公共哲学的意義をめぐる議論を今後展開していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 21 件)

【本研究テーマを直接扱った研究成果】

中島邦雄、F・G・ユンガーの『技術の完成』とエコロジー 「富」と「時間」の理論を中心に、『かいりす』第52号、2014、29-48、査読有

今井敦、ユンガー兄弟の技術論 「総動員 / 総流動化 (die totale Mobilmachung)」概念を軸として、『ドイツ文学』(NEUE BEITRÄGE ZUR GERMANISTIK) 第148号、2014、56-70、査読有

桐原隆弘、目的論と技術的合理性 F・G・ユンガー『技術の完成』におけるカント解釈を手がかりとして、『下関市立大学論集』第57巻第3号、2014、69-92、査読無

今井敦、革命的ナショナリズムから技術批判へ F・G・ユンガーの技術論(1) 『Germanistik Kyoto』第13号、2012、1-19、査読有

【本研究テーマと関連する研究成果】

桐原隆弘、戦後和解の倫理的要件 ドイツ「新東方政策」形成過程における「故郷権」概念をめぐる宗教的議論に着目して、広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター編『ぷらくしす』第16号、2015、11-26、査読無

桐原隆弘、カントにおける「可想的性格」の概念と法の規範性(下) 『下関市立大学論集』第58巻第3号、2015、55-70、査読無

桐原隆弘、カントにおける「可想的性格」の概念と法の規範性(上) 『下関市立大学論集』第58巻第2号、2014、117-130、査読無

桐原隆弘、カント『純粋理性批判』における「実践理性」の位置づけ 合理性概念の再検討のために、『下関市立大学論集』第58巻第1号、57-78、2014、査読無

桐原隆弘、歴史と和解 ドイツ人追放問題を中心に、広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター『ぷらくしす』第15号、23-44、2014、査読無

今井敦、自動車社会への疑問 交通と人権 (エッセイ) 『百色百光』第16号特集「環境と人権」、24-27、2014、査読無

桐原隆弘、理性による道徳の基礎づけについて カント自律道徳の人間学的意

義、『下関市立大学論集』第57巻第2号、73-94、2013、査読無

桐原隆弘、ロールズとハーバース 民主主義の普遍妥当性をめぐる論争、『下関市立大学論集』第57巻第1号、1-26、2013、査読無

桐原隆弘、歴史哲学における和解概念の起源と展開 ユルゲン・ヒュレン『人間の基本構造としての疎外と和解』(1982年)を手がかりに、広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター編『ぶらくしす』第14号、1-10、2013、査読無

今井敦、フィッシャー=ディースカウへの感謝(エッセイ)『世界文学』第117号、73-75、2013、査読無

中島邦雄、アルフレート・ボイムラーとカール・ケレーニイの神話学 トーマス・マンによるバッハオーフェン受容とフマニスムス、『かいりす』第51号、42-64、2013、査読有

小長谷大介、三村剛昂と広大理論物理学研究所、日本物理学会『日本物理学会誌』第68巻第10号、685-687、2013、査読有

小長谷大介、戦時下における広島文理科大学大理論物理学研究所の設置、『立命館経営』第52巻第2・3号、203-215、2013、査読無

小長谷大介、島津製作所の製品特性と技術 島津に宿る技術の多様性をめぐって、龍谷大学大学院経営学研究科付置機関京都産業学センター『京都産業学研究シリーズ・ブックレット 第一巻 島津製作所』晃洋書房、2013、査読無

桐原隆弘、カントにおける「人類」の概念とユダヤ教・キリスト教観、『下関市立大学論集』第56巻第2号、43-55、2012、査読無

今井敦、南チロルの歴史『CRONACA』133号、3-7、2012、依頼原稿(一般寄稿) 査読無

中島邦雄、トーマス・マンとアルフレート・ボイムラー バッハオーフェン受容における屈折した軌跡(3)、『かいりす』50号、32-56、2012、査読有

〔学会発表〕(計 2 件)

中島邦雄、F・G・ユンガーの『技術の完成』とエコロジー 「富」と「時間」の理論を中心に、西日本独文学会、2014年11月29日、宮日会館(宮崎市)

中島邦雄、アルフレート・ボイムラーとカール・ケレーニイの神話学 「深さ」とフマニスムス、西日本独文学会、2013年12月7日、ホルトホール大分(大

分市)

小長谷大介、Yukawa and Tomonaga: an Effective Combination in the Flourishing of Physics in Postwar Japan, XXIV International Congress of History of Science, Technology and Medicine, 2013年7月21日~2013年7月28日、Manchester, UK

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桐原 隆弘(KIRIHARA, Takahiro)

下関市立大学・経済学部・教授

研究者番号: 70573450

(2) 研究分担者

今井 敦(IMAI, Atsushi)

龍谷大学・経済学部・教授

研究者番号: 10380742

(3) 研究分担者

中島 邦雄(NAKASHIMA, Kunio)

独立行政法人水産大学校・水産流通経営学
科・教授

研究者番号: 00416455

(4) 研究分担者

小長谷 大介(KONAGAYA, Daisuke)

龍谷大学・経営学部・准教授

(5) 研究協力者

福山美和子(FUKUYAMA, Miwako)

(6) 研究協力者

熊谷エミ子(KUMAGAYA, Emiko)

元龍谷大学非常勤講師

(7) 研究協力者

増田靖彦(MASUDA, Yasuhiko)

龍谷大学・経営学部・准教授

(8) 研究協力者

西尾宇広(NISHIO, Takahiro)

龍谷大学・非常勤講師

(9) 研究協力者

稲葉瑛司(INABA, Eiji)

京都大学大学院生